

翻弄される博物館

博物館の運営には人とお金とがどうしても必要になる。とりわけ公的な博物館には、行政のサポートが欠かせない。必然的に博物館は施政者の思惑に揺れ動くことになる。市民、施政者、博物館の三者の関係は博物館の課題のトレンドにさえなっている。

みんぱくが位置する大阪府では、五年ほど前、府政合理化の流れのなかで博物館をはじめとする多くの文化施設が廃止された。みんぱくは国立機関なので影響がなかったが、予算は削られつづけている。文化施設は、かくも政治に翻弄されやすい。

民族の相互理解のために

今回紹介したいのは、大阪の博物館でも日本のでもない。まずは写真を見ていただく。これは、マダガスカル地方都市トゥリアラにある、大学付属博物館の展示である。この博物館は、マダガスカル口承記録研究センターという大学の研究機関が運営している。「博物館を併設した研究所」という意味では、みんぱくと同じといってよい。

ちがうのは、みんぱくが国立でありながら世界じゅうの文化を紹介しているのに対して、同じく国立のトゥリアラ大学付属博物館は、逆にマダガスカルの一地域だけを扱っている点だ。後者が扱うトゥリアラ州という地域は、国の一部にすぎないが、さまざまな風土と社会環境のもとにさまざまな文化が営まれている。そして、とくに村落部では、くらしの多様さの理由が民族のちがいに求められる傾向が強い。マダガスカル博物館は、こうした国内や地域内の多様性を出発点としながら、文化的背景を異にする人たちの相互理解を支援するよう期待されているのだ。

写真に写っている彫像は、アルアルという墓碑の先端にほどこされた装飾である。こうした装飾は、マハリアリ人のあいだでさかんに製作されている。かつては、別のある民族集団でも墓碑の装飾が一般的だったが、詳しくみるとアルアルの様式とは異なる。アルアルは、マハリアリ人の民族的シンボルとなりつつある。

地方色が強いという点だけならば、日本でも類似の展示を地方博物館でみかける。しかしそれは、どちらかという過去のくらしを展示したもので、その地域が歩んできた歴史を示すことに強い関心がある。トゥリアラ大学付属博物館の場合はそうではなく、身近な他者の現在を理解する意図のもとに、結果として展示に地方色があらわれている。このことは、多文化状況に置かれた国に共通だろうが、アフリカ大陸などでとくに強く感じる点である。

国政と博物館

ここまで書いたことも、博物館と国政との関係をよくあらわしている。文化状況をふまえながら、博物館によって多文化の共存や価値観の統一をはかることは、まさしく国政の課題だからだ。しかし、マダガスカル博物館にとってもっとも大きな問題は、別にある。国政が、博物館に運営資金をじゅうぶん注いでいないのだ。

最初の写真をもう一度見ていただきたい。背景に、タイプライターかワープロで印字したA4の紙がみえる。印字した紙をそのまま壁に貼りつけて、展示解説としているのだ。パネルにプリントした写真もあるが、白黒であるために、遠い過去のような印象を受ける。このパネルが製作されたころ（おそらく一九七〇年代）には、白黒写真もほどほどにリアルな表現手段だったのだろう。しかしデジタル写真が普及した現在では、マダガスカルの人びとでも、こうした写真の内容を過去のものとして受けとるようになってきている。

古い表現手段を更新できずに長らく放置し、あたらしい展示解説が必要になるとオフィス機器で簡易に作るというのが、マダガスカル国立博物館の現状だ。それは、展示内容の良し悪しには関係ない。だが、博物館の置かれた状況がかくも端的にあらわれる例は、あえて紹介しておきたかった。

じつをいうと、運営資金をじゅうぶん与えられていなくとも、展示場を公開できる博物館はまだましである。マダガスカルでは、二〇〇九年に大統領が追放され、暫定政権が発足して以来、大学生によるデモが断続的に頻発している。大学によっては博物館を開くところではないし、高等教育省直属で大学と関係ない博物館も、新装開館のタイミングを見はからって閉館したままだ。

マダガスカルでは二〇一三年の一月と二月に大統領選挙がおこなわれ、正常化の道をたどりつつある。じつさいに国政が正常化するのはまだ時間がかかりそうだが、博物館の状況も一刻も早く改善してもらいたい。



アルアルの彫像部分（みんぱくのアフリカ展示場で展示中）

飯田卓
民博先端人類科学研究部



トゥリアラ大学付属博物館のアルアル（撮影・荒川裕子 みんぱく友の会会員）



墓地で用いられているアルアル



トゥリアラ大学付属博物館の展示



アンタナナリブ大学付属博物館収蔵庫での資料調査。この収蔵庫の保存管理には、日本人研究者も協力している